『読むことのアレゴリー』を読む(1)

土　田　知　則

はじめに

ポール・ド・マン――誰もがそのテクストの途轍もない力に魅了・圧倒され、そのスキャンダラスとも言える強烈さと難解さに呆然自失してしまうような存在にもかかわらず、いわゆる核心的著作と評価されるテクストがいまだ相応の形で紹介・論及されているとは言い難い一人の受難の文学理論家[1)]。1919年12月 6 日、ベルギーのアントワープに生まれ、1983年12月21日、異国アメリカの地で癌のために亡くなったド・マンはJ.ヒリス・ミラー、ジェフリー・ハートマン、ハロルド・ブルームとともにアメリカにおける「脱構築批評（deconstructive criticism）」の担い手として活躍した「イェール学派」の中心人物である。ベルギー時代の彼は『ル・ソワール』紙、『ヘット・フラームスヘ・ラント』紙などに膨大な記事を寄稿し[2)]、文学や思想に関する文章も数多く認(したた)めているが、学者としての本格的なスタートはハーヴァード大学で博士号を取得する1959年以降のことと見てよいだろう。したがって、この遅蒔きの学者の残した著作はそれほど多いとは言えない。しかも、著者自身が生前に発表しえた本は 2 冊のみで、その他のものはすべて死後刊行となっている。以下にこれまで書物の形で上梓されているものをリスト・アップしておくことにしよう。

Blindness and Insight: Essays in the Rhetoric of Contemporary Criticism, University of Minnesota Press, 1971, 1983（2nd edition）
［『盲目と洞察――現代批評のレトリックに関する試論集』］

Allegories of Reading: Figural Language in Rousseau, Nietzsche, Rilke, and Proust, Yale University Press, 1979［『読むことのアレゴリー――ルソー、ニーチェ、リルケ、プルーストにおける比喩的言語』］

H. Bloom, P. de Man, J. Derrida, G. Hartman and J. –Hillis Miller, eds., *Deconstruction and Criticism*, Seabury Press,　1979［『ディコンストラクションと批評』］

The Rhetoric of Romanticism, Columbia University Press, 1984［邦訳、『ロマン主義のレトリック』山形和美・岩坪友子訳、法政大学出版局、1998年］

The Resistance to Theory, University of Minnesota Press, 1986［邦訳、『理論への抵抗』大河内昌・富山太佳夫訳、国文社、1992年］

Wartime Jouranlism, 1939–1943, eds. Werner Hamacher, Neil Hertz and Thomas Keenan, University of Nebraska Press, 1988［『戦時ジャーナリズム　1939―1943年』］

Critical Writings: 1953–1978, ed. Lindsay Waters, University of Minnesota Press, 1989［『批評的著作　1953―1978年』］

Romanticism and Contemporary Criticism: The Gauss Seminar and Other Papers, eds. E.S. Burt, Kevin Newmark and Andrzej Warminski, Johns Hopkins University Press,　1993［『ロマン主義と現代批評――ガウス・セミナーおよびその他の論考』］

Aesthetic Ideology, ed. Andrzej Warminski, University of Minnesota Press, 1996［『美のイデオロギー』］

※上記著作物にうち最初の２冊のみが生前刊行されたものである。

以上の著作リストから既に明らかなように、現在までのところ完全な形で邦訳されているのは『ロマン主義のレトリック』、『理論への抵抗』のわずか２冊のみであり、ド・マンの名を実質的に世に知らしめることになる論文集『盲目と洞察』、そして主著と目される『読むことのアレゴリー』は依然として邦訳の作業からほぼ完全に取り残されている[3)]。

こうした状況を考えるなら、未訳、既訳に関係なく、ド・マンの著作全体を資料体として分析・検討し、この異端的かつ希有な文学理論家の思想を明らかにするのが理想的な筋道と言えるだろう。しかし、そのような作業はコンパクトな形ながら、既にリーズ大学のマーティン・マックィランの手によってなされてしまっている[4)]。したがって、本論考ではマックィランの手法とはいささか異なるやり方で、この難解な理論家の仕事に光を当てるという方途を敢えて選び取りたいと思う。こうした選択は先にも触れたように、日本におけるド・マン受容の特殊な状況に起因している。だが、それは何よりもまず、一つのテクスト――この場合は『読むことのアレゴリー』――を丹念に読み解き、いまだ邦訳も存在しない１冊の記念碑的テクストの全貌を明らかにしようという筆者の姿勢を色濃く反映するものである。本論考のタイトルに付された（１）という数字は、この論考が『読むことのアレゴリー』というテクストをめぐってなされることになる遠大な（期限なき？）作業を予告するものであり、本論考がそうした作業に向けてのいわばプロローグとなることを示唆している。では、本論に立ち入る前に、われわれの「読み」のターゲットとなるテクスト、『読むことのアレゴリー』の目次内容を紹介しておくことにしよう[5)]。以後に展開される予定の分析・検討（あるいは紹介）は基本的にこの目次にそって進められて行くことになるであろう。

『読むことのアレゴリー』(1979年)

［目　　次］

第一部　レトリック
　第一章　記号論とレトリック
　第二章　トロープ（リルケ）
　第三章　読むこと（プルースト）
　第四章　生成と系譜（ニーチェ）
　第五章　トロープのレトリック（ニーチェ）
　第六章　説得のレトリック（ニーチェ）
第二部　ルソー
　第一章　隠喩（『人間不平等起源論』）
　第二章　自己（『ピグマリオン』）
　第三章　アレゴリー（『ジュリーまたは新エロイーズ』）
　第四章　読むことのアレゴリー（『サヴォア人司祭の信仰告白』）
　第五章　約束（『社会契約論』）
　第六章　言い訳（『告白録』）

Ⅰ　読むことのアポリア　　「記号論とレトリック」

サブ・タイトルからも伺えるように、『読むことのアレゴリー』は４人の作家・思想家たち――ルソー、ニーチェ、リルケ、プルースト――の具体的なテクストに対する精緻な「読み」から構成されている。したがって、唯一具体的な固有名との結びつきを解かれた巻頭論考「記号論とレトリック」は残りの11篇の論考とは異質の、いわばこの書物の総論的な１篇として読むことが可能であるかもしれない。だが、予想に反し、この論考――および第一部に収めれたニーチェ、リルケに関する４篇の論考――は、プルースト論やこの書物の後半部分（第二部）を構成するルソー論の陰に隠れて、

普段はあまり正面から問題にされることはない。とはいえ、その一方でド・マンの名を人々に知らしめることに最大の力を発揮したと思われるあの「修辞疑問文（rhetorical question）」をめぐる挿話（アーチー・バンカー氏のエピソード）がこの巻頭論考の中心に位置することもまた厳然たる事実なのである。唯一固有名との緊密な繋がりを解かれたこの論考が、もしも単なる装飾的な緒論などではなく、この書物全体の総論的な問題提起の役割を演じるものであるとするなら、それははたして何を話題にし、読者をいかなる「読み」の場に導こうとしているのであろうか。論考の内容を検討してみることにしよう。

形式＝内在的批評vs対象指向的批評

『読むことのアレゴリー』が刊行された70年代末という時代は文学批評史の流れのなかでも極めてドラスティックな転換期の一つにあたると考えてよいだろう。60年代に隆盛を誇った構造主義的文学批評が徐々にその威光を失い始め、ポスト構造主義的と総称される様々な批評実践の試みが繰り広げられていた時期である。しかし、構造主義とポスト構造主義は決して截然と区別されるものではなく、後者はそのもっとも本質的な部分において前者の問題意識を根強く受け継いでいる。それは一言で言うなら、言語記号（signe）と言語外的な指示対象（référent）との乖離という意識であり、ド・マンの要約的な説明に従うなら、「文学は単に余すところなく解読されうる指示的意味（referential meaning）の明確な一装置としては考えられない[6]」ということである。しかし、このようなテクスト中心主義的姿勢に対して、言語外的（現実的、社会的、歴史的）な要素を重視しようとする動きが現れてくる。ド・マンは明言していないが、こうした動きの典型例はおそらく『読むことのアレゴリー』の翌年に上梓されるスティーヴン・グリーンブラットの『ルネサンスにおける自己形成[7]』が提起した「ニュー・ヒストリシズム」あるいは「文化の詩学」と呼ばれる方法論であろう。ちなみに、ド・マンは「指示対象」へと向かう反－内在的批評の眼目をこう述べている。「強調されているのは文学の虚構的なステイタス――現在おそらく少々安

易に自明視され過ぎている属性――ではなく、そのような諸々の虚構と、たとえば自己・人間・社会、あるいはある批評家が言うように『芸術家、その文化、そして人間社会』のような、現実性を帯びていると言われている諸カテゴリーとの間の相互作用である」(p. 3)。かくして「物語の構造分析」のような文学テクストの内的・形式的・個別的な構造を分析しようとする内在的批評に対し、文学言語の外的・対象指示的・公的な意味や効果に光をあてようとする反-内在的批評が敢然と対置されることになる。後者の主張に従うなら、内在的な形式主義（formalism）は必要以上に還元的で、「言語の牢獄」（F．ジェイムソン）から永久に脱することができないということになるだろう。一方、F．ド・ソシュールの記号学やR．ヤーコブソンの言語学（とりわけ言語の詩的機能についての分析）から多くの知見を譲り受けた形式主義的な批評にとっては、構造＝形式が意味や内容を包み込むための単なる「外的な装飾」(p. 4）などではなく、内的な「自己省察＝反射（self-reflection)」(p. 4）のための特権的な対象であるということになるであろう。つまり、「指示的意味（referential meaning)」こそが重要であるとする反-形式主義的な批評に対し、形式主義的批評は指示的意味を外的・付随的なステイタスに格下げしてしまうのである。ド・マンの慧眼が見抜くように、ここには「内部/外部」という二極的な図式の反転が生じている。内的・中心的な位置に大切に据え置かれてきた「意味」は付随的な「外的指示性（outside reference)」(p. 4）の立場へと縮減され、逆に外的な形式がテクストにとって本質的な「内在的構造（intrinsic structure)」(p. 4）へと格上げされたのである。

では、ド・マン自身はいったいどちらの批評実践に与しているのであろうか。外部的な指示性を重視する反-形式主義的な批評の優勢化現象に対し、ド・マンは最初に次のように述べている。「さしあたって、私はこうした傾向それ自体を、否定しえない反復的な歴史的事実として、その真偽、およびそれが望ましいとか有害だとかいった価値をぬきにして、簡単に論じてみたいと思う」(pp. 3-4)。こうした微妙な物言いは、誰よりもラディカルなテクスト中心主義者と捉えられがちなド・マンの関心が、内在的批評陣営と外在的批評陣営との対立という二項的な議論反復とは明らかに別の位相にあるこ

とを示唆している。それは一言で言うなら「内部/外部」という二項対立的かつ欺瞞的な「メタファー」の問題、そしてさらに具体的に規定するなら「意味」と「形式」との和解をめぐって生じる修辞的錯乱に関わる諸問題に他ならない。

フランス派記号論への批判

構造主義の落とし子であるフランス派記号論の流れは、「意味」の問題を括弧入れすることで「指示対象性（reference）の権威」（p. 5）を宥めすかし、とりわけ「記号と指示対象との間の意味論的対応という神話」（p. 6）を解体するのに大いなる力を発揮した。これは無論、過小評価してはならない重要なできごとである。しかし、ド・マンの問題意識はこうしたいわゆる「言語論的転回」を超えた位相に据えられている。実を言えば、彼自身は内在的批評対外在的批評といった、この先もおそらく永遠に反復されるであろう議論にも、また両者の和解にもほとんど興味を示してはいない[8]。彼の慧眼がえぐり出す決定的な問題、そして今後『読むことのアレゴリー』のなかで様々な形で議論されることになる中心的な考察課題は、フランス派文学記号論の旗手たちに向けられた次のような激烈な批判のうちに顕著に表明されていると見てよいだろう。

> 今日、フランスやその他の地で実践されている文学記号論のもっとも顕著な特徴の一つは、文法的（とりわけ統語論的）構造と修辞的構造とを、両者間にありうる食い違いに対しての明確な自覚なしに結合させて用いている、ということである。バルト、ジュネット、トドロフ、グレマスおよび彼らの弟子たちは皆、文学的な分析において、文法とレトリックの機能を完全に連続させ、なんの困難も妨害もなしに文法的構造から修辞的構造へと移行するという点で、ヤーコブソンを単純化するとともに、ヤーコブソンから退行している（p. 6）。

つまり、フランス的な文学記号論の提唱した比喩（tropes）や文彩（figures）

に関する研究は文法的・統語論的研究の支配下でなされる二次的なサブ研究のようなものにすぎず、レトリックの分析は普遍文法という強固で一枚岩的なパターンに同化・吸収されてしまうのだ。プルーストのテクストを隠喩の「モノポリズム」から解放し、類比関係の内部そのものにおける隠喩と換喩の共存関係、つまりは「隠喩内部における換喩の役割[9]」を明らかにしようとするジュネットの画期的な論考（「プルーストにおける換喩」）でさえ、こうしたド・マンの批判を逃れることはできない。ド・マンはジュネットが範列的（paradigmatic）で隠喩的な文彩と連辞的（syntagmatic）で換喩的な構造とを無造作に結合し、両者間に生じる可能性のある「論理的緊張」(p. 7) の契機をいっさい考慮に入れていないと論じている。つまり、彼に言わせるなら、ジュネットの分析は比喩を文法に重ね合わせるという完全に「記述的かつ非弁証法的」(p. 7) な性格のものであり、構造主義的記号論の悪しき還元主義から一歩も踏み出してはいないということになるであろう[10]。チョムスキーの生成変形文法の前提がそうであったように、記号論による比喩の分析は単一的な生成モデル――チョムスキーの用語では深層構造――を出発点に、あらゆる比喩表現を文法的体系という連辞的側面だけに切り詰めてしまうものだったわけである。

言語行為論への批判

ド・マンは著作のいたる所で「言語行為論（Speech acts theory)」に対し強い関心を示し続けている。しかし、その評価は概して否定的であるように思われる。Ｊ．Ｌ．オースティンの説明では文法、論理、言語行為の間にはいかなる断絶や障害も想定されておらず、われわれはいわば「言語行為と文法の間をなんの困難もなく行き来すること」(pp. 7–8) ができてしまうことになる、とド・マンは難じている。つまり、彼が批判しているのは、発話に託された意味なり「意図[11]」はそれを伝達するのに適した文法構造に乗せるだけでなんの問題もなく相手の手に届いてしまう、という発想である。ここにはコミュニケーションの分析を同一コードの共有という対称的なモデルから開始する伝統的伝達理論への手厳しい批判を読み取ることも可能だが、

ド・マン的な視点から見るなら、むしろ問題にされているのは意味と文法的構造との間に生じうる、断絶・齟齬という言語現象に対するあまりにも無自覚な姿勢ということになるであろう。これは無論、記号論に向けられている批判と同じ性質のものである。言語行為理論の前提を要約し、ド・マンはこう述べている。「言語の内部で命令、質問、否定、想定などのような発語内行為（illocutionary acts）と呼ばれているものを遂行することは、それらに対応する命令文、疑問文、否定文、祈願文における文法的構文構造と一致する」（p. 8）。ここには、先ほど内在的批評と外在的批評との対立をめぐって立ち現れた「意味」と「形式」の和解という図式が変奏的に反復されている。比喩を文法に還元しようとする構造主義的記号論、そして意味＝意図を文法的構造と等価であると考える言語行為理論は、表現や方法論上の違いこそあるものの、結局は意味と形式との間に湧出するかもしれぬ「論理的緊張」に対しては目を閉ざしたままなのである。

ニーチェ的言語意識の継承者たち――ケネス・バークとチャールズ・サンダース・パース

では、意味と形式、あるいは比喩と文法との間の不連続性を明敏に感じ取り、両項の間に生じる「論理的緊張」に注目した思想家はこれまでまったく存在しなかったのであろうか。こうした問題提起に対して、ド・マンはアメリカ生まれの二人の思想家の名を挙げている。一人は構造主義の父と称えられるソシュール（1857―1913）とはまったく異質で晦渋な記号学を展開したチャールズ・サンダース・パース（1839―1914）、そしてもう一人は『文学形式の哲学』（1941年）、『動機の文法』（1945年）、『宗教の修辞学』（1961年）、『象徴行動としての言語』（1966年）などの著書で知られるあのケネス・バーク（1897―1986）である。

先ずパースについて、ド・マンはこの記号論者のキー概念の一つとなった「解釈項」（あるいは「解釈内容」）［interpretant］という考え方に着目している。ここではパース記号学の詳細に立ち入ることは差し控えたいが[12]、この「解釈項」という難解な用語については、記号と対象物の間に介在し、

解釈の始動ないしは「読み」(reading) の産出を可能にするための必須のファクターである、とひとまずは説明することができるだろう。ド・マン自身の要約的説明によるなら、記号と対象物の間に生じるのは一義的な「解読（decodage）」ではなく、解釈項に媒介された「読み」であり、この「読み」は「別の記号へ、それからさらに別の記号へと無限に解釈されていかねばならないもの」(p. 9) ということになるであろう。パースは永久的に「ずれ」を生み出すようなこうした記号の無限解釈プロセスを「純粋レトリック」と呼んでいるが、そこには意味と形式との和解を前提とする「純粋文法」や「純粋論理」に対する疑念が深い陰を落としていると考えられる。

ド・マンがバークにおいて注目しているのは「偏向」あるいは「ぶれ＝ゆがみ」とでも訳すべき《deflection》という概念である。ド・マンの解釈によれば、この概念はフロイトの言う「置換（displacement）[13]」の概念と比較されるうるものだが、バークはそれを「あらゆるかすかな偏差、さらに言えば、意図的ではない誤り」(p. 8) と定義している。ド・マンの説明を見てみよう。

> ケネス・バークは（. . . . . .）［《deflection》という概念］を言語のレトリカルな基盤とみなしている。つまりそれは文法的パターンの内部で作用する記号と意味の無矛盾的な連結を弁証法的に転覆するものと考えられている。ここから文法とレトリックの区別というバークの有名な主張が生まれるのである（p. 8）。

バークによる「偏向」という概念の定義、さらにはそれに対するド・マンの説明を読み直すと、このアメリカの哲学者の考え方がド・マンによる「ディコンストラクション」の方法や実践に対し、ジャック・デリダの思想とは別角度からの光を投じていることにあらためて気づかされる[14]。バークとド・マンの発想に共通しているのは、意味と形式＝記号、あるいはレトリックと文法との間の「偏差」という考え方であり、とりわけ重要なのはそうした「偏差」が意図的な操作をへて生み出されるものではないという指摘にある。バークの言う「意図的ではないあやまり」とは、言語が言語である

上で余儀なくされる「ずれ」――すなわち「偏向」――であり、デリダの言う「差延（différance）」、さらにはバーバラ・ジョンソンの言う「批評的差異（critical difference）[15]」ないしは「内的差異」に相当するものとみなしてよいだろう。こうした「ずれ＝偏差」は意図的な作用によって生じるものではない。「偏差」への契機は言語内部のいたる所に潜在し、テクストは外部からの意図的・暴力的な力を加えるまでもなく内部から自然と綻びをきたすのだ。これは言うまでもなくディコンストラクション批評に通底する共通認識であろう。ド・マンが「ディコンストラクションとは、われわれがテクストに付け加えた何かではなく、そもそも最初からそれがテクストを構成していたのである」（p. 17）と述べるとき、彼が主張しようとしているのはまさにそのことなのである。

文法とレトリックが齟齬をきたすとき

このように、ド・マンは意味と形式、レトリックと文法との間に生じる「論理的な緊張」を認識の外部に追いやり、文法的構造とレトリック的構造との間に安易な「和解」的対応図式を打ち立てようとしてきた批評的方法を執拗かつ適切に批判している。こうした批判からは構造主義の隆盛を築いたとされるフランスの錚々たる記号論者たち――バルト、ジュネット、トドロフ、グレマスなど――も決して逃れることはできない。というよりも、そうした批評方法の実践をもっとも効率よく担ってしまったのが、他ならぬ彼らだったわけである。では、文法とレトリックとの連続性を断ち切る「ずれ＝偏差」を分析するにあたり、ド・マンははたしていかなるモデルを提示し、この問題に対処しようとしたのであろうか。以下にその辺りの経緯を見て行くことにしよう。

これほどの大問題を扱うものでありながら、ド・マンが持ち出す言説例は拍子抜けがするほど単純で日常的なものである（ド・マン自身はこうした所作を「プラグマティックな言説に退却するほかない」［p. 9］とやや遠慮がちに述べている）。ところで、彼が壮大な「レトリカル・リーディング」（p. 15）の実践に向かうための出発点に据えたもの、それは「文法的構造とレトリカ

ルな構造との明瞭な共生を示す、おそらくもっとも一般的によく知られた例」(p. 9)、すなわち「レトリカル・クエスチョン」と呼び習わされている疑問形構文に他ならない。

Ⅰ．アーチー・バンカーの苛立ち

レトリカル・クエスチョンの一例はいわゆる文学や哲学のテクストからではなく、マス・メディア作品から採られている。この例はド・マンの議論を広く人々に知らしめた重要なものなので、多少長くなるが、その分析に関係する部分を以下に引用しておくことにしよう。

> ボーリング・シューズの紐を上結びにしたいか下結びにしたいかを妻に訊ねられ、アーチー・バンカー（Archie Bunker）は〝What's the difference？〟という質問で応じる。極めて単純な読解者（reader）である彼の妻は、辛抱強く上結びと下結びの違いを説明するのだが、どう説明しても夫の怒りをそそるばかりである。〝What's the difference？〟〔どう違うんだい？〕は違いを訊ねているのではなく、〝I don't give a damn what the difference is.〟〔どう違おうとどうでもいいよ〕を意味しているのである。同一の文法的パターンが相互に排他的な二つの意味を生む。字義どおりの意味（literal meaning）は概念（違い）を求めているが、その存在は比喩的な意味（figurative meaning）によって否定されてしまう。事がボーリング・シューズの問題に留まっていれば、結果はそう大したことではない。アーチー・バンカーは起源の権威（無論、正しい起源でなければならないが）を大いに信頼しているので、不愉快を感じないわけではないが、字義どおりの意味と比喩的な意味が互いに邪魔し合う世界を何とか切り抜ける。だが、ここで〝What's the Difference？〟と問うのが「バンカー」ではなく、否定する人（de-Bunker）であり、起源（arche/origin）の〝de-bunker〟、たとえばニーチェやジャック・デリダのような〝archie Debunker〟だとしてみよう[16]。彼の文法からは、彼が「実際に」「どんな」差異を知りたがっているのか、あるいはそんなものは見出そうとさえすべきでは

ないと言っているのかが分からないのである。文法とレトリックの差異という問題に直面するとき、文法はわれわれに質問を発することを許すが、われわれが質問を発するために用いる文は、まさに質問の可能性そのものを否定してしまうかもしれない。というのも、私はそれを問いたいのだが、ある質問が問うているのか問うていないのかを明確に決定することさえできないならば、質問を発することはそもそも何の役に立つというのだろうか（pp. 9–10）。

この夫婦のやりとりにおいてアーチー・バンカーが発する単純な一文の例（"What's the difference？"）は、統辞的にまったく明快な文法形式が、同時に二つ以上の意味を有するような文を産出してしまう経緯を雄弁に物語っている。だが、この場合、「二つ以上の[17]」という言い方はいわゆる「多義的な」という表現とは性質を異にしている。言語が多義的であるというのは決して珍しいことではない。多義性の問題圏においては、考えられうる複数の意味を同時に維持することが可能であり、言語使用の価値や意義は――たとえば詩的言語表現におけるように――まさにそうした可能性のうちにあるとさえ言えるだろう。

アーチーの言葉がとりわけスキャンダラスであるのは、それが単に多義的であるからではなく、それが二つのまったく相容れない意味を生じさせ、「文法的あるいは他の言語学的な方策によっては〔. . . . . .〕どちらがより支配＝説得的であるかを決定することが不可能」（p. 10）になってしまうからである。さらに言うなら、意味の決定不可能性は文法形式の決定不可能性を連動的に生じさせる。文法形式的には明快な疑問文であるはずの"What's the difference？"という一文がそもそも疑問文であるか否かを決定するのも、意味の場合と同じく、原理的にはまったく不可能と考えられるからである。

こうした考え方を必要以上の杞憂として一笑に付すことは確かに可能かもしれない。ド・マンも言うように、バンカー夫妻の行き違いは、「たとえばアーチー・バンカーが妻の思い違いを正すといったような、テクスト外的な意図の介入によって〔. . . . . .〕解決される」（p. 10）と考えられるから

だ。だが、たとえそうであるにせよ、それはあくまでも何らかのテクスト外的な力に訴えかけることによってしかなされえない。テクストの内部に引き起こされる意味の「レトリカルな[18]」決定不可能性については、個々の解釈による以外いかなる対処のしようもないし、その場合、どの解釈がはたして支配＝説得的であるかを決める基準のようなものはどこにも存在していないからである。アメリカ人夫婦の一見何の変哲もない会話のなかに不意に引き起こされた苛立ちが、ド・マンにとって（そしてたぶんアーチー・バンカーにとっても）火急の意味合いを帯びるのはそのためである。それはその場限りの問題として瞬時のうちにクリアーされていくようなもの（ド・マンの言う「ミニ・テクストの一部」〔p. 10〕）では決してなく、言語そのものが必然的に内包せざるをえないような意味的構造の「ずれ＝偏差」という深刻な事態に他ならない。ド・マンは、われわれの意図や論理では把捉しきれないそうした言語の揺動、そしてある種の脅威を、アーチーの不安と重ね合わせながら次のように表現している。

> だが、まさに彼〔＝アーチー〕がみせる怒りは苛立ち以上のものを示している。つまりそれは自分ではコントロールできないような、そして将来似たような混乱が無限に生じ、もしかするとそのどれもが無残な結果に終わるかもしれないという悲観的な見とおしを与えるような、言語的意味構造に直面させられたときの彼の絶望を暴き出している(p. 10)。

ド・マンの言語意識に終始つきまとうアーチー的な苛立ちは、その後イェール学派の系譜に連なる人たち（ショシャナ・フェルマン、バーバラ・ジョンソンなど）によっても精密に分析されていくことになるが[19]、こうした言語の「内的な差異」という問題について語る際もっとも重要なのは、やはりフランスの哲学者ジャック・デリダの存在であろう。もはやあらためて指摘するまでもなく、アーチーが遭遇する二つの意味間の決定不可能性という現象は、デリダが機会あるごとに暴き出してきたものに他ならない。ド・マンが「文」（レトリカル・クエスチョン）のレヴェルに見出したアポリアを、デリダはさらにミクロな「語」のレヴェルに探りあてていたのである[20]。

だが、おそらくデリダの念頭にあるものも、ド・マンの場合と同様、「ミニ・テクストの一部」に留まるような問題ではないだろう。両者の暴き出したレトリカルな緊張は、決して語や文といったミクロ的な次元の問題に留まるものではない。ド・マンが敢然と主張するように、それこそまさに「文学」そのものなのである（「私は言語のレトリック的、比喩的な潜在可能性を文学そのものと同等視することに何らためらいを覚えないであろう」〔p. 10〕）。

Ⅱ．踊り子と舞踏をどうして切り離しえようか？

アーチー・バンカーのエピソードとは対照的に、ド・マンはレトリカル・クエスチョンを考察するためのもう一つの例を文学テクストから選び取っている。それはアイルランドの詩人ウィリアム・バトラー・イェイツ（1865—1939）の詩、「学童たちの間で」の最終行にあたる、「踊り子と舞踏をどうして切り離しえようか？」（How can we know the dancer from the dance？）という一文である。ド・マンの説明に従うなら、「この一行は通常、レトリカルな技巧を強く打ち出し、形式と経験、創造者と創造との潜在的な統一性を述べている、と解釈されている」（p. 11）。つまり、この疑問文は何の疑いもなく反語的なレトリカル・クエスチョンとして読まれ——踊り子と舞踏を切り離すことなど不可能だ——、さらに言うなら、この詩篇全体の「一貫した読み方」（p. 11）を規定する思想原理のようなものとして捉えられてきたのだ。換言するなら、この詩を取り扱う学者や批評家たちは、ちょうどバンカー夫人とは逆のしぐさを繰り返す形で、この疑問文に対する字義どおりの読み方を排除してきたと言えるだろう。

ド・マンはそれに対し、いわばバンカー夫人流の読みの可能性を対峙してみせる。「しかし、この最終行を比喩的というよりむしろ字義的に〔. . . . . .〕読むことも同様に可能なのだ」（p. 11）。このような指摘には比喩的/字義的という、意味の決定不可能な二重性という問題とあわせて、「同一なるもの（le même）」と「他なるもの（l'autre）」との間に想定されがちな権力的位階関係への懸念が表明されている。われわれはともすると比喩的な読み方を字義的な読み方に優先させ、後者を「極めて単純な読解者」（p. 9）によるしぐさとみなしがちだが、それは明らかに誤っている。比喩

的な読みは解釈を洗練された複雑なものにし、字義的な読みはそれを単純化（一義化）する、という一見もっともらしい論理では、言語に潜む本質的な「偏差」を説明することができない。何故なら、このイェイツの一行をめぐってなされてきた解釈（この疑問文が反語的なレトリカル・クエスチョンであるとする見解）は、この詩の「一貫した読み方」を押しつけているという意味で解釈の一義化を誘導し、結果的に「他なるもの」の可能性を封じ込めているからである。つまり、この場合、より複雑な解釈を惹起させるのは明らかに字義的な読みの方であり、「同一化しえないものを同一化するという誤り」(p. 11) をおかしてしまっているのは比喩的な読みの方なのである。問題の最終行をレトリカル・クエスチョンと解釈することで、確かにこの詩の統一性は確保され、「連続性という、力強い聖化されたイメージ」(p. 11) の安寧は維持されるだろう。だが、もしもこの一行を字義的に解釈したとすればいったいどうなるであろうか。踊り子と舞踏は区別できない一体のものであるとする根強い主張はあえなく却下され、われわれは「踊り子と舞踏の差異を区別する方法をどうか教えてくれ」という切迫した懇願に直面させられることになるだろう。つまり、本来単純素朴であるはずの字義的な読みが採用された瞬間、この詩の統一的な安定性は失われ、この「詩全体の様態ばかりか、そのムードさえも逆転させてしまう」(p. 12) ような結果に立ち至ることになるのだ。

イェイツのこの一行をめぐってなされる議論には、ド・マンの中枢的なキー・ワードである「アレゴリー」についての間接的説明と思われる一節を見出すことができる。「アレゴリー」という用語こそ用いてはいないものの、同一のテクストに対する二つの「読み」――比喩的な読みと字義的な読み――の関係を語る次のような言明のなかに、われわれは既にド・マン特有の「アレゴリー」の定義に通底するものを読み取ることができるであろう。それはまた、ド・マンがこの書物のなかで初めて「ディコンストラクト」という言葉を使う重要な一節でもある。

> 最初の読みによって構築された図式全体が、第二の読みによって根崩れし――あるいはディコンストラクト［脱構築］――されてしまうこと

もありうる〔. . . . . .〕(pp. 11–12)。

ある一つのテクストのなかで、ある一つの比喩ないしは論理に基づいてなされる「読み」の行為が、その同じテクストに顔を覗かせるもう一つの別な比喩ないしは論理の働きによって根崩しにされ、脱構築されてしまうような「読み」のありようを、ド・マンは「アレゴリー」あるいは「読むことのアレゴリー」という言葉で言い表していると考えられる[21]。このとき第一の「読み」と第二の「読み」は「各々が完全な首尾一貫性を有している」(p. 12)。しかし、それは両者が同時に対等な意味をもつということではない。ド・マンが言うように、「この二つの読みは互いに直接的な対決にもちこまれざるをえない。何故なら、一方の読みは他方の読みによって明確に否定されている誤りであり、それによって取り消されねばならないからだ」(p. 12)。つまり、われわれはある語なり、文なり、テクストについて提起される相互に排他的な二つの意味＝解釈を、両方同時に選択することはできない。結局は必ずどちらか一方を選ばねばならないのだ。したがって、問題はこれら二つの読みのどちらに対して優先権を与えるべきか、ということになる。だが、そうした選択に対しては誰も永遠に妥当な決定を下すことはできないのである。読みの行為のなかで遭遇するこうした永久的な堂々巡り。われわれはそれを「読むことのアポリア」と呼ぶことにしよう。

妥当な決定を下す可能性を永久的に宙づりにされながらも、どちらか一方を選ばねばならないこうしたアポリア的な状況について思考することは、予想されるように、倫理や責任性の問題とも密接に関わっている。たとえば、デリダの仕事を翻訳という視点から考察したキャスリーン・デイヴィスの書物『ディコンストラクションと翻訳[22]』は「決定」という行為に関してド・マンの議論に通底する見解を打ち出している。まさに「アポリア」という小見出しの付された文章のなかで、デイヴィスは「決定の可能性はその決定不可能性に依拠している〔. . . . . .〕われわれは決定不可能性に直面するときに初めて現実的に決定を下し、責任を引き受けることになる[23]」、そしてまた「いかなる通路もない〔. . . . . .〕したがって、翻訳者は決定不可能なものを決定し、既に決められた開かれた通路を経ずに翻訳へと到達し

なければならない[24)]」と主張している。翻訳も本質的には「読み」あるいは解釈の行為に他ならない以上、翻訳と「読み」の問題が永遠の未決性というアポリア的状況において出会うのは何ら不思議なことではない。そして、こうしたアポリア的状況は翻訳の場においてもまた言語の「内的な差異」という宿痾的な「偏差」から出来するのである[25)]。

翻訳、つまり「読み」の行為は必然的にアポリアを通過しなければならない。余談になるかもしれないが、デリダはアポリアを通り抜ける行為を「正義」の問題と関係づけ、この「正義」を「ほとんど神的なもの」と説明している。ここで「ほとんど」という限定辞が付されているのは、アポリアの通過（正義）が完全に「神的なもの」ではありえないという理由だけによるのではない。それはまた、アポリアを横断することが決して真実のステイタスを要求することがないからなのである[26)]。

メタファーとしての「読むこと」――マルセルの読書空間

論考の後半部では「読むこと」という経験的な行為をめぐり、マルセル・プルーストのテクスト（『失われた時を求めて』）の一節――主人公の少年マルセルがコンブレーの薄暗い部屋で読書する場面――が取り扱われている。この一節はド・マンにとっては極めて重要な意味をもつものであり、ここでの議論は後により綿密な形で展開されることになる（『読むことのアレゴリー』、第一部、第三章「読むこと（プルースト）」）。したがって、詳細な議論は後にゆずることにし、ここではド・マンの論点の幾つかを簡単に抽出しておくことにしよう。

内部と外部の統一、あるいはメタファーの優位性

ド・マンは先ず、プルーストがこの一節において試みているのは、「読む」という経験を外的な意味と内的な理解との統一、つまりは外部と内部との一致として提示することである、と主張する。そして、プルーストはこうした和解的統一の実現をもっとも効果的かつ優位的に推進するのがメタファーで

あると考えている、というのである。

メタファーが西洋のギリシア・キリスト教的文化において常に中心的・絶対的な比喩であり続けてきたことは確かである[28]。プルーストの使用する「メタファー」という語が、伝統的修辞学の規定するこの語の定義と完全に符合するかどうかについてはいささか疑問であるが[27]、ド・マンの見解に従うなら、プルーストもまたこのメタファー優先型の思考を受け継いでいることになる。というより、マルセルの読書を語るエピソードで展開されるのは、他ならぬメトニミーに対するメタファーの絶対的な優位性という議論なのである。ド・マン自身の言い方を借りるなら、「この一節はメトニミーに対するメタファーの美学的優位性について書かれたもの」（p. 14）ということになるだろう。

しかしながら、ド・マンは、ほとんど神聖的とみなされてきたメタファーの美学的優位性は、まさにこの一節をレトリカルに読み直すことで完全に瓦解してしまうと断言する。

> しかし、当のテクストが自ら説いていることを実践していないことを示すためには、ほとんど洞察力を必要としない。この一節をレトリカルに読むならば、比喩的な実践とメタ比喩的な理論が一致しないこと、そして、メトニミーに対するメタファーの優位性という主張が、その説得力をメトニミックな構造の使用に負っていることが明らかにされてしまう（p. 15）。

ド・マンは、自ら引用したプルーストのテクストのどこにこの瓦解的な契機が潜んでいるのかについては明言していない。だが、その箇所をつきとめることは、おそらくそう難しくはないだろう。プルーストのテクストは夏の十全なる経験を喚起するための二つの方法としてメタファー的なプロセスとメトニミー的なプロセスを提起し、その一方、つまり前者を優位に置こうとしている。たとえば、蝿のぶんぶんいう音は「夏」と必然的に結ばれ、この季節を十全に呼び覚ます優れたメタファーとして説明されている。しかし、この場合、蝿の音と夏はメタファーの主導原理であるはずの「類似性」によっ

て仲立ちされてはいない。逆説的なことに、この両者の関係を決めているのはメタファー的な「類似性」ではなく――蝿の音と夏のいったいどこが似ているというのか？――、メトニミー的な「隣接性」なのである。プルーストは問題の蝿についてこう述べている。

> それからまた、そのすばらしい光の感覚は、私の目の前で、小さな楽団を組んで、夏の室内楽のようなものを演奏している蝿たちによってしか伝えられないこともあった（p. 13. 強調は引用者による）〔井上究一郎訳、表記一部変更〕。

このような図式はさらに数行あとでも繰り返される。そこでは、夏の十全な「現前性（presence）」（p. 14）を担うメタファーである蝿の室内楽は「夏が実際に目の前にあり、あたりを取り巻き、直接に近づきうることを確証するものなのである」（p. 13. 井上訳、表記一部変更）と説明されている。つまり、蝿の音と夏は互いに類似しているためではなく、「私」の眼前で隣接的に出会うために結ばれ合うのである。

メタファーの優位性、すなわちその必然性を主張しようとする言説がこのようなパラドックスに直面してしまうのは何故であろうか。その理由の一つは必然性を類似性に、そして偶然性を隣接性に結びつけ、そうした仮想的な二項対立関係を優位性判断のための美学的な基準として定立してしまう、というしぐさに求められるであろう。つまり、ド・マンはプルーストのテクストが呈するこうした脱構築的な言語作用のうちに、ニーチェが「形而上学批判」（p. 15）に着手する際、言語に見ていたものと同種のものを読み取っているのだ。ド・マンの次の言葉はそうした姿勢を雄弁に物語るものと捉えうるだろう。「こうした形而上学批判への鍵は〔. . . . . .〕、比喩のレトリカルなモデル、あるいはむしろそう呼びたいのであれば、文学である」（p. 15）。

文法のレトリック化とレトリックの文法化

ド・マンはレトリカル・クエスチョンにおいて生じるような意味の宙づり化（アーチー・バンカーの場合）を「文法のレトリック化（rhetorization〔s〕of grammar)」、そしてプルーストのテクストに立ち現れるようなレトリックの脱神秘化＝脱構築化を「レトリックの文法化（grammatization of rhetoric)」と名づけている（p. 15)。前者についてはこれ以上説明を加える必要はないように思える。だが、後者に関する難解な議論について理解するためには、強靭な知解力と極めて大胆な認識の転換が要求されるだろう[29)]。

「レトリックの文法化」という考え方は、疑いなく、『読むことのアレゴリー』の最終部分（p. 294以下）で突然提起される「機械（machine)」というドラスティックな概念を予告するものと言えよう[30)]。実際、ド・マンは「レトリックの文法化」について説明する際、それをレトリックの内部で作用する「文法的形式の機械的・反復的様相」（p. 15）と表現しているからである。ちなみに、ド・マンは後に「機械」という概念を定義し、「機械とはレトリックから引き離されたときのテクスト文法のようなもの、つまり、それなしではいかなるテクストも生成されえないような、完全に形式的な要素のことである」（p. 294）と述べている。「文法」とは「機械」であり、一つの「プログラム化されたパターン」（p. 16）に他ならない。なるほど、ここまでは容易く理解できるだろう。だが、ド・マンは大胆にも、この「文法＝機械」による形式的・反復的な作用を言語そのものの根幹に位置づけるのだ。そして、これがたぶんこの議論においてもっとも肝要、かつもっとも難解な点なのだが、言語とは、高度に特殊化された個人的創意・発明の産物とみなされている比喩の場合も含め、機械的に反復される文法パターンにすべてを負うものである、とド・マンは主張するに至るのである。したがって、このことに気づかず、メタファーの優位性や個人的な才能について云々している者たちは「ナイーヴなメタファー的神秘化に囚われた読者」（p. 16）として批判されることになるだろう。何故なら、彼らはたとえばメタファーの美学的価値を称揚する際、言語の機械性という本質を無視するだけでなく、歴然とした「差異」を隠蔽するための方途として「類似性」という概念を一方的

に特権化する、という二重の欺瞞に陥っているからである。

この場でド・マンの読者たちを悩ます「機械」という特異な用語に対し、的確かつ十分な説明を与え切ることは困難であろう。だが、少なくとも、ド・マンがこの無機質な用語を採用するときに見えてくるのは主として次の三つの問題意識ではないだろうか。

先ず一つは、何ものにも縛られない個人の「独創的な（original）」才能といった考え方に対する疑念。たとえば、ある比喩表現がいくら秀逸と評価されようと、言語によって生み出されるものである以上、それは既に――そして常に――機械的にプログラム化されている文法的なパターンに従うしかない。つまり、純粋に「オリジナルな」言説などは、この世のどこにも存在しない、ということである[31)]。優位性、生成的歴史性、意志の自立性といった欺瞞的なメタファーに向けられたド・マンの疑念は、そうした事態を明確に見据えている。

> そのような読み〔＝メタファーなど、あらゆるレトリカルなパターンの脱構築〕は、われわれの批評言説の価値判断を下支えする一連の概念全体――最上位、生成的歴史といったメタファー、そしてもっとも顕著なものである、自己の自律的な意志力というメタファー――を疑問に付すのだ（p. 16）。

二つ目は、ほとんど何の根拠もないままに、異なる言説パターンの間に審美的なヒエラルキー関係を定立してしまうという形而上学的な欺瞞行為に対する疑念。そうした関係定立の典型例が、既に触れたメトニミーに対するメタファーの優位性という主張である。メタファーは何故にメトニミーよりも必然的な比喩であると言いうるのか。それは、「類似性」が「隣接性」以上に優れた言語属性だからだろうか。もしそうであるなら、何故メトニミーに対するメタファーの優位性という主張は、「その説得力をメトニミックな構造の使用」（p. 15）に頼るはめになってしまうのか。比喩的言説をも含めたあらゆる言説の生成を特殊な才能のみが与かる創造行為としてではなく、「文法的形式の機械的・反復的様相」の発現として捉えるならば、個々の比

喩表現の間に優劣の差を設ける根拠はどこにも存在しなくなる。つまり、メタファーの力を神聖視し続けてきたギリシア・キリスト教的な思考パターン――西洋形而上学的精神――はいかなる絶対性ももちえない、特殊なイデオロギー装置の一つに過ぎないことが暴き出されることになるのだ。

「機械」という概念によって提起される三つ目の問題意識は、「ディコンストラクション」批評の根幹に関わるものと言えるだろう。「ディコンストラクション（deconstruction）」という造語的な用語が「破壊（destruction）」という言葉と無縁であるのは、それが外部から意図的に加えられる（暴）力ではなく、言語やテクストの内部に初めから伏在している（プログラム化されている）瓦解作用と再プログラム化への可能性を意味するからである。つまり、テクストは作者や読者の力によって脱構築されるのではなく、テクスト自体の内部に組み込まれた「偏差」（パラドックス、アポリア）によって自らを脱構築するのだ（「ディコンストラクションとは、われわれがテクストに付け加えた何かではなく、そもそも最初からそれがテクストを構成していたのである」〔p. 17〕）。換言するなら、ディコンストラクションは作者や読者の「意図」とまったく無関係な位相で生じる。それは引き起こされるのではなく、起こるべくして起こるのである。

もっとも厳密であるが故に、もっとも信頼しがたい言語

ド・マンが分析した二つのタイプのレトリカルな現象――文法のレトリック化、およびレトリックの文法化――は、その様態こそ異なるものの、結局はわれわれを「宙づりにされた無知の状態」（p. 19）のままに据え置くことになる。「文法のレトリック化」が前景化するのが、相容れない二つの「読み」の間に生じてしまう永久的な未決性であるとするなら、他方、「レトリックの文法化」がわれわれに突きつけているのは、プルーストのテクストのレトリカルな様態を一元的に決定することの不可能性――それはメタファー（的）なのか、それともメトニミー（的）なのか？――に他ならない。つまり、ド・マンの言うように、「文学テクストのレトリカルな様態に関するあらゆる問いは、常に、それが本当に問うているのかすら知らないレ

トリカル・クエスチョンなのである」(p. 19) ということになるだろう。ド・マンは「読むこと」がアポリアとしてしか現出しえない（おそらく）最大の理由を、「言語が何をしているのかを知ることの不可能性」(p. 19) に求めている[32)]。しかし、これは言語に対する絶対的な懐疑を意味するものではありえないだろう。この論考を締めくくるド・マンの言葉は、そのパラドクシカルな響きのなかに、言語に対する不安と希望を同時に託しているように思える。

> 批評と同様に文学は――両者間に違いがあるとするのは幻想だ――、人間がそれによって自己を名づけ変形する、もっとも厳密であるが故に、またもっとも信頼しがたい言語であることを永久に宣告されて（あるいは、特権づけられて）いる（p. 19)。

【註】

1）誤解を避けるために一言しておくなら、これはあくまでも日本における現状を表現したものである。欧米諸国（とりわけアメリカ）において優れたド・マン研究が量産されていることは言うまでもない。

2）これらの記事を集成した書物が以下の著作リストにある *Wartime Journalism　1939–1943* である。ちなみに、ナチズムに加担したとされる問題の記事「現代文学におけるユダヤ人」は、1941年 3 月 4 日、『ル・ソワール』紙に掲載されている。

3）しかしながら、これらの書物に含まれる論文の邦訳が皆無である言うのは正確さを欠くことになるだろう。例えば、これから論じる予定である『読むことのアレゴリー』の巻頭論文「記号論とレトリック」には柄谷行人氏による邦訳が存在する（『現代思想』1981. 7　vol. 9–7／1981. 8　vol. 9–9)。なお、ド・マンの哲学的思想の集大成と考えられる最後の著作『美のイデオロギー』は『美学イデオロギー』のタイトルで上野成利氏の翻訳作業が進められている（『批評空間』、太田出版)。『読むことのアレゴリー』については既に10年以上前に邦訳の計画を耳にしたことがあるが、依然として刊行されるという話は伝わって来ない。

4）Martin McQuillan, *Paul de Man*, Routledge, 2001. 邦訳は拙訳『ポール・ド・マンの思想』、新曜社、2002年。

5）この目次の作成については『現代思想』1986. 4（vol. 14–4）に掲載された水村美苗氏の紹介文（pp. 130–136）を参考にさせていただいた。短いものとはいえ、水村氏のこの文章は『読むことのアレゴリー』についての簡潔な紹介文としてだけではなく、自らがド・マンの教え子であった人の貴重な証言としても読むことができるだろう。

6）Paul de Man, *Allegories of Reading: Figural Language in Rousseau, Nietzsche, Rilke, and Proust*, Yale University Press, 1979, p. 4. 以後ド・マンのテクストへの言及はこの版に基づくものとし、引用箇所はページ数のみで示すことにする。

7）邦訳は『ルネサンスの自己成型』、高田茂樹訳、みすず書房、1992年。

8）内と外を分離する一種の箱のようなものを文学のメタフォリカルな和解モデルとみなす姿勢に対して、ド・マンは次のように述べている。「箱の内部を内容と呼ぼうと形式と呼ぼうと、また外部を意味と呼ぼうと外観と呼ぼうとほとんど問題ではない」（p. 5）。

9）Gérard Genette, *Figures III*, Éd. du Seuil, 1972, p. 42.

10）ここにはド・マン特有の隠喩・換喩観が顔をのぞかせていると言えるかもしれない。それは対比的に並置されている形容辞と名詞との結びつきからある程度明らかになるであろう。範列的＝隠喩的という形容辞が「比喩」という用語と結びつけられているのに対し、連辞的＝換喩的という形容辞には「構造」――すなわち文法的構造――という用語が結びつけられている。「連辞」あるいは「統語論」という用語が「構造」や「文法」に近しい性質のものであることは十分理解できる。では、「換喩」という概念の位置づけはどうなっているのであろうか。「換喩」は「文法」の側に与し、「比喩」の外部に排除されているのであろうか。

11）意図（intention）という概念をめぐっては詳細な検討が必要であるが、言語行為論者は発話者の意図を重視する立場にあり、対するド・マンは意図という概念そのものに強い疑念を抱いている。こうした議論については、次の論考を参照せよ。Stanley Corngold,《Paul de Man on the Contingency of Intention》, in *(Dis) continuities: Essays on Paul de Man*, edited by Luc Herman, Kris Humbeeck and Geert Lernout, Rodopi, 1989.

12）パース記号学については、たとえば次の著作を参照せよ。なお、

〈interpretant〉の訳語について本稿では「解釈項」を採用したが、米盛裕二氏は「解釈内容」としている。
米盛裕二、『パースの記号学』、勁草書房、1981年（特に、第五章）。
Nicole Everaert-Desmedt, *Le processus interprétatif: introduction à la sémiotique de Ch. S. Peirce*, Mardaga, 1990.

13）柄谷氏はフロイトの用語である〝displacement″（ドイツ語では〝Verschiebung″）を「転移」と訳しているが（前掲訳、1981．7、111頁）、これは明らかに誤解であろう。〝displacement″とは分析者と被分析者との間に生じる「転移」ではなく、いわゆる「圧縮」とともに夢の形成をつかさどる「置き換え」（ないしは「置換」）の働きと解されねばならない。ちなみに、精神分析学で言う「転移」（Übertragung）という語の英訳としては〝transference″が一般的である。この点に関しては、たとえば次の著作を参照せよ。Ｊ．ラプランシュ／Ｊ.-Ｂ．ポンタリス、『精神分析用語辞典』、村上仁監訳、1977年、みすず書房。

14）筆者は以前、バークの「文学形式の哲学」に関する小文を書く機会に恵まれた。そこで主張したバークとディコンストラクション批評との同質性については今でもその見解を変えていない。以下にその一節を引いておきたいと思う。

> 科学技術批判に与するバークは、バルトが「文学」対「科学」という形で示すことになる「言語」の問題を、「詩的な意味」と「意味論的な意味」という言い方で提示している。バークによるなら、前者は情緒的な要素を最大限に包み込む性質のものであり、他方後者の方は、明晰性を曇らせ、曖昧性をもたらす情緒的な要素を可能な限り切り捨てようとする性質のものであるというわけである。つまり、言語が必然的に抱え込む矛盾やパラドックスといった要素を抹殺せず、それらをあるがままに引き受けようとするバルト的な姿勢を、バークはバルトよりも20年近くも前に自己のものとしていたのである。こうしたバークの立場は、作品の内的首尾一貫性の原理を出し抜く必然的な矛盾性という問題、つまりは70年代から80年代にポール・ド・マンの仕事に代表される「ディコンストラクション批評」が好んで取り上げることになる「内的矛盾」ないしは「内的差異」という問題を予告する射程の広さを有していると言えるかもしれない。論理的なものと詩的なものを対比する一節で、バークは次のように述べている。「論文による説得と詩による説得との

違いは論文が首尾一貫性をそなえうるのに対し、詩は必然的に矛盾を包み込む、という点だろう。」バークはまた、二者択一的な問題設定を厳しく批判するが、ここにもまた二項対立的な図式の転覆をはかるディコンストラクション批評と同質の性格を認めてよいかもしれない（『ユリイカ』、〈総特集　20世紀を読む〉、1997年４月臨時増刊号〔Vol. 29-5〕、41頁、青土社）。

15）Cf. Barbara Johnson, *The Critical Difference: Essays in the Contemporary Rhetoric of Reading*, The Johns Hopkins University Press, 1980.

16）柄谷氏は〝de-Bunker〟に「覆いを剥ぐ人」という訳語を当てているが（前掲訳、1981．7、112頁）、この語の語源となる動詞の〝debunk〟には「否定する」という意味合いもあるので、あえて「否定する人」と訳出した。起源神話を否定するニーチェやデリダの立場を考慮するなら、この訳語で十分事足りるであろう。ちなみに、仏訳版に付された註では〝debunk〟に対して〝démentir〟という語が当てられている（Cf. *Allégories de la lecture: Le langage figuré chez Rousseau, Nietzsche, Rilke et Proust*, Traduction et présentation de Thomas TREZISE, Éditions Galilée, 1989, p. 31n）。〝démentir〟という動詞には「否定する」、「打ち消す」、「否認する」といった意味がある。

17）ド・マンは「二つ以上の」ではなく、「少なくとも二つ以上の」（p. 10）という微妙な言い方をしている。しかし、こうした議論がなされる際、実際に問題とされるのは「二つの」相容れない意味である場合がほとんどである。

18）念のため、ここでド・マンが言う「レトリカル」という語の定義を確認しておくことにしよう。アーチー・バンカーのエピソードを説明した後、ド・マンは次のように述べている。

> 私は一般の言葉づかいにならって、こうした記号論的な謎を「レトリカル」と呼ぶことにする。質問の文法的モデルがレトリカルとなるのは、われわれが一方で字義どおりの意味を有し、他方で比喩的な意味を有しているようなときではなく、文法的あるいは他の言語学的な方策によっては（まったく相容れないこともありうる）二つの意味のうちどちらがより支配＝説得的であるかを決定することが不可能な場合である。レトリックは論理を根本的に宙づりにし、指示対象的逸脱の目眩く可能性を押し開くのである（p. 10）。

次いで、ド・マンは「レトリカル」という語の使用法をさらに押し進め、

言語の有する比喩的・レトリック的な可能性を「文学」そのものと同等視している（p. 10）。つまり、単なる統辞論的・形態論な一文例にすぎないと思えるレトリカル・クエスチョンが提起する問題も、彼にとっては決してローカルな話題を提供するものではなく、あらゆる言語テクスト（とりわけ文学テクスト）の根本に関わる痛切なものなのである。

19）このような問題に対してとりわけ敏感であったのはバーバラ・ジョンソンであるが、彼女の言う「批評的差異」あるいは「内的差異」（註〔15〕の文献を参照せよ）という概念は、明らかにデリダの提起した「差延（différance）」という問題設定の一変奏と捉えうるであろう。

20）よく知られた分析なので、議論の詳細に立ち入ることは差し控えることにするが、デリダはプラトンが使用する〝pharmakon〟、そしてルソーのテクストに現れる〝supplément〟という語を相反する二つの意味を有する用語例として取り上げ、意味の未決性＝決定不可能性をめぐる精密な議論を展開している。具体的な分析については、それぞれ以下の文献を参照せよ。*La Dissémination*, Éd. du Seuil, 1972/『根源の彼方に――グラマトロジーについて』上・下、足立和浩訳、現代思潮社、1971、72年。

21）「アレゴリー」という用語に関するド・マン独自の使用法については、後の議論の過程で次第にその詳細が明らかにされることになるだろう。

22）Kathleen Davis, *Deconstruction and Translation*, St. Jerome Publishing, 2001.

23）*Ibid*., p. 93.

24）*Ibid*., p. 94.

25）ちなみに、デイヴィスはその点について次のように述べている。「翻訳にとって、アポリアの（不）可能性は、言語があらゆるアイデンティティと同じように、既に自己分裂、すなわち自己矛盾をきたしているという問題と関係している」（*Ibid*., p. 93）。

26）Cf. *ibid*., p. 97.

27）プルーストにおける「メタファー」という用語の特異な定義づけについては、既に別なところで議論したことがある。詳細については、拙著『プルースト　反転するトポス』、新曜社、1999年（特に、付論Ⅳ「直喩はどこに消えたのか」）を参照せよ。

28）この問題については、たとえば次の文献を参照せよ。スーザン・A・ハンデルマン、『誰がモーセを殺したか――現代文学理論におけるラビ的解釈の出

現』、山形和美訳、法政大学出版局、1987年。

29) ド・マンのイェール時代の盟友Ｊ．ヒリス・ミラーはド・マンの晦渋極まりない概念や発想を「アレルゲン」(読む者にアレルギーを引き起こすもの)と表現しているが、この「レトリックの文法化」という概念も確実にそうしたアレルゲンの一つと言えるだろう。Cf. J. Hillis Miller, *Others*, Princeton University Press, 2001.

30) この「機械」あるいは「機械的」という無機質な用語は、おそらくそれと緊密に連動すると思われる「物質性（materiality）」という用語とともに、ド・マン後期の思想展開を決定づける枢要なキー・タームとなるであろう。この点に関する詳細な議論については、以下の文献を参照せよ。Geoffrey Bennington, “Aberrations: de Man（and）the Machine”, in *Reading de Man Reading*, Lindsay Waters & Wlad Godzich（eds), University of Minnesota Press, 1989/Tom Cohen, Barbara Cohen, J. Hillis Miller, Andrzej Warminski（eds), *Material Events: Paul de Man and the Afterlife of Theory*, University of Minnesota Press, 2001.

31)「オリジナルなもの」という概念を脱神話化しようとする意識は、たとえば文学理論の分野においては「間テクスト性」という視点を生み出した。この発想は主としてジュリア・クリステヴァに帰せられるが、イェールにおいてド・マンの同僚の一人であったハロルド・ブルームも 「間テクスト性」に関する有力な理論家である。「間テクスト性」をめぐる詳しい議論については以下の文献を参照せよ。拙著、『間テクスト性の戦略』、夏目書房、2000年／グレアム・アレン、『文学・文化研究の新展開　間テクスト性』、森田孟訳、研究社、2002年。

32) このような視点は、ド・マンにＪ．Ｌ．オースティンらの「言語行為論」に対する批判を準備させることになるであろう。ド・マンと「言語行為論」をめぐる問題については、たとえば次の文献を参照せよ。J. Hillis Miller, *Speech Acts in Literature*, Stanford University Press, 2001, pp. 140–154.